



蟹江合戦400年記念特別展より

蟹江合戦400年記念特別展の期間中、旧蟹江本町庄屋鈴木家の特別の御厚意により当館へ寄託されたものである。

鈴木家は、蟹江合戦での活躍（鈴木家文書(一)―由緒書き参照）を機に、その後の尾張藩政に深くかかわる（鈴木家文書―新田関係参照）基盤をつくり、藩政の中で有力な土豪としての立場を得ることとなった。

これらは尾張藩主又は、その親縁の深いものが「お成り」と称して、鈴木家に休泊する際の接待用食器類である。何れも黒塗りに三ツ葉葵紋入りの漆器で、鈴木家の丁重な扱いがうかがえられる。これと同時に寄託された茶器等も気品の高いすばらしいもので、多くの入館者に本町の歴史に対する関心を昂めた意義の深いものであった。

（蟹江町歴史民俗資料館 伊藤和孝）

目 次

- 昭和60年度愛知県博物館協会県内研修会報告…………… 2
- 博物館における情報処理について…………… 3

昭和60年度愛知県博物館協会 県内研修会報告

昭和60年度愛知県博物館協会県内研修会は9月12日、13日渥美町にて開催されました。以下その概要を記します。

初日は会場シーサイド伊良湖にて愛博協会長鈴木睦美氏、開催地となった渥美町教育長のあいさつのあと、「資料交換と展示企画の問題点」というテーマで3人より報告があった。



最初の浅田氏（愛知県陶磁器資料館）よりは、九州の資料館の襲撃と自館の瀬戸物陶磁器の資料交換の具体的事例、さらに交換展示による場合の主催者側の経費削減などについて経験を踏まえた話があり、本研修会のテーマを設定するに至った理由説明、問題提起があった。



次いで2番目の服部氏（昭和美術館）よりは、資料交換というものを基本財産と運用財産の使い分けにより可能としつつも、財産の評価額の移動になる資料交換は難しいと論じた。さらに、東洋美術系資料館相互での資料交換展示になる展覧会の同時開催の例が出され、運搬、保険、図録、印刷の諸経費が折半により節約できる点、相互館での人材交流さらに研究交流へと発展する利点について報告があった。

3番目の富樫氏（和紙展示館）からは、展示企画

ということに焦点をあてて、自館のかかえている問題点が示された。展示立案にいたる過程での展示委員会、幹事に館の実状を把握している館職員の意見が反映されない点、委員の人選などの問題点を中心に話があった。



報告は3人で終わったが、司会者の後藤氏（豊橋市美術博物館）より本研修のテーマに関する参考にとり、浜松市美術館と渡辺小華の共同企画展を開催したときの経験が披露された。共同企画のメリットとして経費の削減、人材の交流による学芸活動の活性化、広範な宣伝アピール活動などが挙げられ、逆にデメリットとして近距離間どうしてであったために前期の開催館の入場者が多くなる点などについて端的に報告があった。

このあと討論に入ったが、おもに資料交換について話が進んだ。本研修参加館のなかで実際に資料交換を行なっている館は人文系ではほとんどなく、自然史系においても水野氏（モンキーセンター）「現地から直接猿の血液が輸入不可の場合に動物園相互で血液の交換をする」岩田氏（碧南市青少年海の科学館）「水族館では種の交換をする」家田氏（豊橋市地下資源館）「資料交換はやらない」大谷氏（伊良湖自然博物館）「資料交換はやらない」の発言にみられるように資料交換は一部の特殊な部分に限ぎられていた。このために海老沢氏（明治村）「資料交換は相互の館での意向が一致した場合に可能となるもので、一般的にはおこりにくい」の意見のように実際例が少ないための討論が煮詰らなかつた。

又、岡田氏（渥美町郷土資料館）より渥美町内出土の埋蔵文化財を豊橋市より地元に戻した体験が話され、「資料が存在伝来した土地、地域に置いて見ることが、そのものに対する理解を深めることになり、さらに資料のあった場所を自分の足で訪ねてみるのが社会教育の学習になる」と資料交換の問題点を指摘する発言を行なった。

資料交換による展示企画という面では、山田氏（熱田神宮宝物館）が、「資料交換展示には相互のニーズの一致を必要とするが、最近の安易な行政サイドに

よる単に物が動くというだけにとどまらず、相互に研究できるという点ではメリットがあるのではないか」と発言を行なった。

討論は不十分であったが、参加者全員から多岐にわたる発言があり、最後に浅田氏が、「資料交換と展示企画がかみあわず十分に討論されたとはいえないが、資料交換においては研究を含めた人的交流まで高めてゆくのが課題である」と討論を締め括った。

翌日の13日は、中電渥美火力発電所、愛知県栽培漁業センター、伊良湖自然科学博物館、渥美町郷土資料館を見学した。

最後になりましたが、本研修会において開催地となりました渥美町の郷土資料館の方々にはお世話になりましたことを、この場を借りてお礼申し上げます。

(三河武士のやかた家康館 家田実行委員)

博物館における情報処理の問題について

—パソコン情報処理の問題について—

松 村 冬 樹

I. はじめに

近年、博物館界においても情報処理にコンピュータを導入しようという気運が高まりつつある。文化庁が実施した情報システム整備のための基礎調査によれば、すでにコンピュータを利用、あるいは近い将来導入を予定している博物館は11%を超えており、さらに52%を超える博物館が導入を希望しているという結果(昭和59年度末)が報告されている。こうした動向の背景として、博物館の普及にともない、博物館の在り方が変質するなかで、情報の持つ重要性が深く認識されるようになったことがあげられる。博物館は従来のモノの収集、保管、研究、陳列をする施設から、情報の収集、処理、提供をする施設への変貌が求められている。この情報処理の効率化のため、コンピュータを導入することは時代の趨勢といえよう。

昭和54年に国立民族学博物館(民博)が先鞭をつけた博物館における情報処理のコンピュータ化は、奈良国立文化研究所(奈文研)、国立歴史民俗博物館(歴博)などに始まり、東京文学文献情報センター、京都大学人文科学研究所、国文学研究資料館など類似施設でもコンピュータを利用した情報処理が行われている。また、文化庁や日本博物館協会では、コンピュータによる全国の博物館資料のデータベース化とネットワークシステムの整備を計画し、そのための基礎調査をすすめている。

このように主に国の機関がパイオニアとなってコンピュータ化がすすむ状況のなかで、われわれ公立私立の博物館の多くは、漠然としたコンピュータ導入の希望をもちながらも、条件整備ができないままに二の足を踏んでいるという実体が浮かびあがってくる。

この小文では、われわれ規模の博物館へのコンピュータ導入について私的な考え方を披瀝するものである。先に述べたように、すでに民博・歴博などでコンピュータを利用したデータベースシステムが稼働している状況下では、コンピュータでなにができるかではなく、コンピュータの記録と検索の機能を最大限に生かしたデータベースの構築が、研究や所蔵資料管理などに有効であるという先例を前提として論をすすめる。

II. 博物館データベースシステムの実際

国立民族学博物館や国立歴史民俗博物館は、コンピュータを利用した情報処理で先駆的な博物館である。このシステムを参考にして、われわれの博物館でできるコンピュータ化を考えてみる。

民博では「民族学の情報センター」として、「館内外の研究者の利用に供するために、コンピュータを活用した情報検索システムを構築する計画」に基き、1)文献図書情報、2)標本資料情報、3)H R A F(人間関係地域ファイル=汎世界的な民族学のデータベース)情報、4)映像音響資料情報の基本的に4種類のデータベースが構築されている。これらをサポートするシステムは、a)ホストコンピュータ、b)漢字情報処理システム、c)大量情報蓄積装置からなるメインシステムと、d)音響情報処理システム、e)画像処理システム、f)標本画像自動処理装置からなる研究用サブシステムに分け整備されている。

メインシステムはホストコンピュータとして汎用大型機(IBM4341)、日本語処理システム、20GB(ギガバイト)磁気ディスクからなり、そのレンタル料は月額1,174万円(昭和55年)ノである。サブシステムも多くソフトウェアが開発され、計測、統計処理、シュミレーションに効果的な活用がなされている。

歴博も民博を下敷きにしたシステムを導入している。データベース化する情報の範囲は、「日本の歴史、考古、民俗学の資料並びに研究業績の全て」とされ、1)収蔵資料管理システム、2)事業運営支援システム、3)研究支援システム、4)図書資料システムの4種でサポートしている。歴博の情報処理システムで特筆すべきは、全国の博物館と結んだネットワーク構想が当初から打ち出されていることである。

これらの先例を参考に、コンピュータ導入に先立つ根本的な問題から検討してみよう。

まず第1に、博物館ネットワーク構想にどう対応するかという問題がある。データベースの全国ネットワークの形成は極めて困難と思われるが、時代の趨勢であることも否定できない。その対応には2通りが考えられる。1つはネットワークの傘下に入る時期まで何もしないか、いま1つは独自にコンピュータによる情報処理を行ってネットワーク構想に備えるかの二者択一である。

次にもし後者をとるならば、コンピュータ導入の目的とか、方向性とか、利用方針といった基本を明確にする必要がある。コンピュータは計測処理や業務管理などさまざまな利用できるが、ここは先例に習い情報検索システムの整備のための、所蔵資料情報、関連情報、図書文献情報データベースの構築を当初の目標と定めたい。

3点目はデータベースとコンピュータシステムの規模の問題がある。民博のように数百万件のデータベースを構築し、また歴博のように中央集中型の情報センターをめざすのでなければ、あれほどの大規模システムは必要ない。また、情報工学の専門職員が望めないわれわれの規模の博物館では、学芸員で扱えるシステムであることが最も大切であろう。

こうした根本的な問題をクリアーするシステムはどのようなものが考えられるだろう。

III. パソコン利用の可能性と限界

III-1 パソコンと情報量

まず、データベースに入力する情報量はどのくらいであろうか。わが博物館の場合、所蔵資料は約10,000件、数万点で、原則的に1件1枚のカード管理している。カード1枚当りの情報量は、歴博の調査によれば平均500字から700字とされている。このデータをコンピュータで扱うのに必要な記憶容量は、文字をすべて漢字とすれば、カード1枚当り、 $700\text{字} \times 2\text{B (バイト)} = 1400\text{B} = 1.4\text{KB (キロバイト)}$ である。全所蔵資料を納めるためには、 $1.4\text{KB} \times 10000\text{件} = 14000\text{KB} = 14\text{MB (メガバイト)}$ の記憶容量が必要となる。

この記憶容量は、現在の中級クラスのパソコンで対応できる。ではパソコンで所蔵資料情報の処理が可能であろうか。よく今のパソコンは昔の中型コンピュータ以上の能力を持つといわれる。しかし、パソコンの優れている点は、1)低価格、2)利用の自由度が高い、3)操作が容易、4)日本語処理が容易という点で、反面高速処理や入出力では大型機に劣る。データベースは情報の大量高速処理をめざすものなので、パソコンには自ずと限界がある。こうしたパ

コンの利点と限界を十分に理解したうえでの導入ならば、パソコンは博物館での情報処理に役立つといえよう。

III-2 ハードウェアとソフトウェア

それでは具体的にどのようなシステムで何ができるのか述べてみよう。

まずコンピュータには、やりたい事をコンピュータに実行させるためのプログラムが必要である。データを蓄積するだけのプログラムは比較的簡単に組むことができる。しかし、データベースとして機能するためには、強力なデータの再加工ができなければならない。そのためのプログラムは複雑で、素人の手に負えるものではない。専門家もなく、豊富な経費もないわれわれの規模の博物館では、多少の使い勝手の悪さには目をつぶり、市販のアプリケーションソフトを用いるのがよいであろう。当座、日本語ワードプロセッサ（ワープロ）とデータベースの2本のソフトを用意する。ワープロはデータの入力用で、辞書機能や文法よりもデータの互換性があるところが第1条件となる。例えばMS-DOSなど標準OS上で動くものがよい。

データベースソフトは、蓄積したデータの検索、並べ替え、抽出などの再加工が可能なソフトウェアであり、基本的には民博や歴博のデータベースと同じものである。データベースにはカード型とリレーショナル型がある。カード型は簡単であるが、かなり制約があり発展性に欠ける。リレーショナル型は簡易言語から発展したソフトウェアで、多少難しいが幅広い応用と拡張性に富む。このソフトは各博物館の実情にあわせて選択すればよいが、カード型は図書文献情報用、リレーショナル型は所蔵資料情報用に適しているといえよう。いずれにせよこのデータベースに日本語ワープロでデータを入力すれば、まがりなりにもデータベースができあがる。

ソフトウェアにはこのほかにも、表計算、グラフ、通信、CADなど豊富にあり、必要に応じて試してみれば、新たなコンピュータの活用法を開発することができよう。

一方機械のほうはハードウェアとよばれる。パソコン本体は、豊富なビジネスソフトが使える16ビット機で、主記憶容量が256KBから512KBくらいのものでよい。外部記憶装置は1MB((メガバイト)のフロッピーディスクドライブ(FDD)2台が必要で、大量の情報を扱うためには20MB以上のハードディスクドライブ(HDD)が接続できる方がよい。CRT(ディスプレイ)はカラー、モノクロいずれでもよいが高解像度のものがよい。漢字プリンターは24ピン以上、B4横の用紙が印字できるものが望ましい。

ハードウェアの価格は一式で80万円から150万円ほど。レンタル料は月額5～6万円（5年）で済む。ソフトウェアは日本語ワープロが3～13万円、データベースが3～35万円ほどある。

III-3 日本語ワープロ

日本語ワープロには、独立型の専用機（スタンドアロン）と、ソフトウェアのものがあつた。ワープロの導入を検討中の博物館もあつたと思うので一言触れておく。独立型の利点は専用機ならではの機能の豊富さと操作性のよさで、フロッピー内の文章がそのまま印刷原稿として電算写植に用いることができる。また、簡易なソート・セレクト、表計算などのできるものも多い。反面、作成したデータに互換性はなく、また再加工もしにくい。例えばワープロで作成した住所録を並べ替え、電話番号を除いた宛名ラベルを印字するというような作業は、ほとんど再入力と同等の手間がかかる。独立型のワープロは文書作成機と割り切って導入するのでなければ、パソコンにワープロソフトを用いるほうが将来性があるといえよう。

III-4 入力

ハード・ソフトが確定すればいよいよ入力ということになるが、大きな障害がある。1つは作業量が膨大なことと、パソコンの入力が英文タイプライターのようなキーボード入力であることが心理的な障害となる。しかも、日本語処理には漢字への変換がネックとなっている。音声入力の完成はまだ先の話であるし、入力を外部委託すれば、1文字当たり1～2円かかり、しかもパソコンのデータの入力を請負うところは非常に少ない。従って入力は学芸員の手で行わざるを得ない。

今の日本語ワープロは学習や単語複写機能が優れているので、コード入力しかできなかった汎用大型コンピュータとは比較にならないほど簡単な日本語処理ができる。1カード内に記載されている項目は平均20～40であろうが、まず全カードのうち5～6項目を入力した後、少しずつ補完してゆけばやがて精度の高いデータベースがつくられよう。

入力の作業量の問題以外にも、入力する項目、名称、キーワード、分類などがやはり問題として残る。これらは後で述べるが、まずは各博物館の現状のやり方のままで入力しても大きな支障はないはずであるし、パソコンレベルのデータベースは、形成やデータの変更が容易なので、試行錯誤しながら始めればよいであろう。

III-4 発展性

このようにして、一応のデータベースが完成した後も、入力すべき情報は増加し続ける。所蔵資料の増えない博物館でも、資料の履歴や研究の成果など

情報精度の向上もデータを増加させる。データ量がパソコンのシステムをオーバーフローするようになった場合、どのような対応が考えられるであろうか。

1つにはミニコンピュータ、次に中型機とシステムアップして対応する方法があるが、費用面では1桁ずつ増加する。また、全データをネットワークシステムのホストコンピュータに移し、端末に徹する方法もある。しかし、パソコンのレベルで情報量の増大に対応できないわけではない。まず外部記憶装置を追加接続する。それが限界となれば、本体の処理能力も不足するので、もう1組のパソコンシステムを追加して、情報を分割し、オンラインで結ぶことにより対応できる。これなら経費面は倍で済む。

その際新しいパソコンはできればワークステーションあるいはインテリジェントターミナルとよばれる16(32)ビット上級機にしたい。主記憶容量1MB、外部記憶100MBクラスでパッケージソフトというメーカー純正ソフトがついているものである。これは大型機の端末として開発されたものでパソコン以上に発展性と信頼性がある。コンピュータの利用では、集中管理の方向へ向かう傾向が強いが、利用する側は分散している方が使い易い。そこでさらに台数を増やしてネットワークで結合し（LAN＝ローカルエリアネットワーク）、メインシステムとサブシステムに機能分化をはかれば、大型機よりも機動性の高い使い分けが可能になる。

ワークステーションの価格は1,000万円を超えるオフコンクラスのものもあるが、本体、FDD、HDD、カラーCRTなどで約200万円ほど、増設HDD約100万円、パッケージソフト約50万円で、約300～400万円ほどのものが多い。

また実用化されたばかりであるが、音楽用のCD（コンパクトディスク）が外部記憶装置に使用できる。CDの記憶容量は1枚で600MB、フロッピー600枚分の容量をもつ。CDプレーヤーには5万円を切るものがあり、非常に安価で手軽な記憶装置といえる。ただし、現在ではこのCDは読みだし専用で、データの入力は外注しなければならないが、辞書や各博物館のデータベースをCDに移し、お互いに交換しあえば簡易で安価なデータベースシステムとなるだろう。

IV. データベース化の問題点

博物館資料のデータベース化には、システム以前に大きな問題点がある。1つは画像処理の問題であり、もう1つは文字情報の入力、検索などの根本となる分類、キーワード、シソーラスなどの統一の問題がある。

画像情報のデータベースで実用化されているものに光ディスクファイルがある。しかし、1,000万円を超える価格と、書き換えが困難な点のほかに、文字情報との統合という面で問題を残している。パソコンで画像情報を扱うとすれば、大容量の記憶装置をもった機種に、イメージスキャナーで入力する方法もあろうが、画像情報は膨大なデータ量を要するので効率的ではない。しばらくは光ディスクの値下がりや、新たなシステムが開発されるのを待つほうがよさそうである。

分類や、キーワード、シソーラスの問題は、データベースの根本にかかる問題を含んでいる。例えば、普段の資料整備の際にも問題となる、どこに分類するのか、記述する項目は、どういう名称をつけるか、読み方はどうするかなどの問題はコンピュータ化しても依然そのまま残る。また、キーワード統一なしに完全な検索はできない。シソーラスというのは用語の上位概念、下位概念、同義語などを集めてつくられた「辞書」で、やはりデータベースの入力や検索に必要なものである。しかし、民博等においてもシソーラスの統一は完成していない状況にあり、われわれの規模の博物館の手におえる事ではない。われわれが辞書を用いて情報検索を行う場合、いわばクロスワードパズルのように求める情報をしばらくこんでいってめざす情報に出会う。まずデータベースをつくり、検索などの利用を重ねるなかで、キーワードやシソーラスの統一を考えていくことが、これからの学芸員の重要な職務の1つとなろう。

V. パソコンによるネットワークシステム

民博や歴博の考える博物館データベースの全国ネット構想は、われわれの規模の博物館が主体的に対応できる事業ではない。しかし、ネットワークシステムの必要性は衆目の一致するところである。しからばネットワーク構想にどのように対応すべきであろうか。

博物館で電話をもたないところはまずない。ということ、あまりにも当たり前に認識されていないが、音声情報ネットワークの機器は完備しているといえる。ただ電話は人が対応するので、情報が正しく処理されないことがあり、このシステムが整備されているとはいえない。

この音声情報ネットワークをつかって、文字情報のやりとりができる。文字や画像を電話回線を利用して電気信号として伝送する電話ファクシミリを導入することで、電話は文字画像情報のネットワークとして機能するようになる。ファクシミリの値段はコピー機に近くなり、NTTの標準機は月5万円ほどで借りることができる。

さらにこのネットワークシステムを発展させることができないだろうか。外部の一部利用者が博物館に求める情報のなかには、博物館の概要紹介、展示期間と内容、交通手段、出版物、事業予定などのいわゆるインフォメーションがある。「博物館ガイド」といった刊行物では、特別展の内容、期間、今後の展示予定などの情報に即応できない。博物館も客商売である以上、観覧者を増やすためのインフォメーションサービスに力をいれる必要がある。このインフォメーションに「ビデオテックス」を利用できる。日本では「キャプテン」（文字図形情報ネットワーク）と呼ばれているこのシステムは、電話でキャプテンセンターのコンピュータに蓄積された情報を呼び出して家庭のテレビに映しだすもので、このシステムならば、各館独自にリアルタイムの文字画像情報を提供することができる。「キャプテン」で情報提供者になるには、例えば「愛博協ネットワーク」としてキャプテン回線に参加する方法（ゲートウェイ）と、各館が個別にIP（情報提供者）となって独自情報をキャプテンセンターに入力しておく方法がある。

キャプテンシステムのIP数は556、利用者端末数は5530台（昭和60年4月現在）と圧倒的に一般利用者が少ないので、各博物館はIPになるとともに来館者用の端末機を備え、コンピュータ時代の街頭テレビの役目を果たす必要があろう。このキャプテン端末に必要な機器は、テレビ受像機、電話機のほかに、専用アダプターで約20～50万円で売られている。IPに必要な入力機も約100万円ほどである。このシステムの利点は、1)文字画像情報が送れる、2)希望の情報を選取できる、3)国主導の完成したシステムである、4)電話回線を利用できるなどで、コンピュータによるネットワークシステムと共通点も多い。

このような身近なシステムを整備することが、将来の全国データベースネットワークシステム化の下地となって生きてくるであろう。

VI. まとめ

博物館における情報処理の機械化は時代の趨勢であり、博物館資料のデータベースがネットワーク化されることは望ましい方向といえる。しかし、専門職員もなく、経費的にも制約のあるわれわれの規模の博物館では、コンピュータ導入のための基礎調査すら満足にできない状況にある。

そこでわれわれは座してこの状況を黙視するのではなく、いま可能な方法で1歩を踏み出そうと思う。技術の進歩によりコンピュータは手の届く価格に下がり、素人にも扱えるようになった。いまわれわれにもパソコンを用いてデータベースが作れ、キャプ

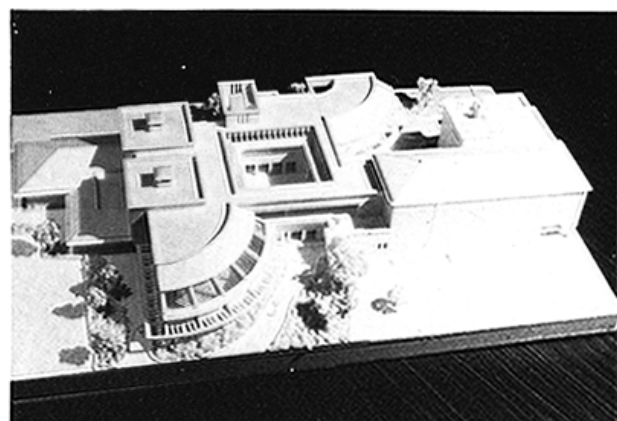
テンを利用した通信ができる。博物館に対する利用者のニーズが変化してきたように、これからの学芸員はコンピュータをはじめとする情報処理機器を駆使することが要求され始めているといえよう。
(名古屋市博物館 学芸員)

参考文献

- ★日本情報処理開発協会「国立歴史民俗博物館(仮称)の情報システム基本計画策定に伴う調査報告書」I・II(1970・71)
- ★及川昭文等「貝塚データベース」『国立民族博物館研究報告』5-2 (1980)
- ★及川昭文・ベジナ・レーモン「博物館とコンピュータ」『国立民族学博物館研究報告』7-3 (1982)
- ★及川昭文「考古学データベースとその課題」『考古学ジャーナル』215 (1983)
- ★大丸弘「衣服標本属性論」『国立民族学博物館研究報告』9-3 (1984)
- ★森田恒之・宇治谷恵「博物館におけるコンピュータシステムの導入」『博物館—その周辺(1)』(1984)
- ★国立民族学博物館「国立民族学博物館十年史」(1984)のうち第6章 資料、第7章 情報化
- ★及川昭文等「美術史学データベースの構築とその課題」『国立歴史民俗博物館研究報告』5 (1985)
- ★シー・ディー・アイ「文化財及び博物館・美術館資料情報システム整備のための基礎調査調査報告書」(1985)

コンピュータの専門書は除外して、博物館とコンピュータの係わりのあるものだけに限定した。

新加盟館紹介



一宮市博物館(仮称)の完成模型

一宮市博物館(仮称)

所在地(事務局): 〒491 一宮市本町通八丁目11番地
一宮市立豊島図書館内
一宮市教育委員会博物館建設準備事務局
TEL <0586>72-2343

(建設地): 〒491 一宮市大和町妙興寺字妙興寺境内及び西之口地内

交通:(事務局)国鉄尾張一宮駅・名鉄新一宮駅下車徒歩10分

(建設地)名鉄妙興寺駅下車徒歩5分

沿革: 当市では昭和35年以来市史編纂事業を継続し、現在までに全22巻を刊行している。また昭和42年ころより教育委員会社会教育課を中心に民俗資料や美術工芸品の収集が行われて来た。

そこで、こうした成果を基礎として歴史系の博物館を新設することとした。昭和58年12月博物館建設に関する基本構想等作成委員要綱施行、60年2月建築・展示設計契約8月建築設計を終了した。

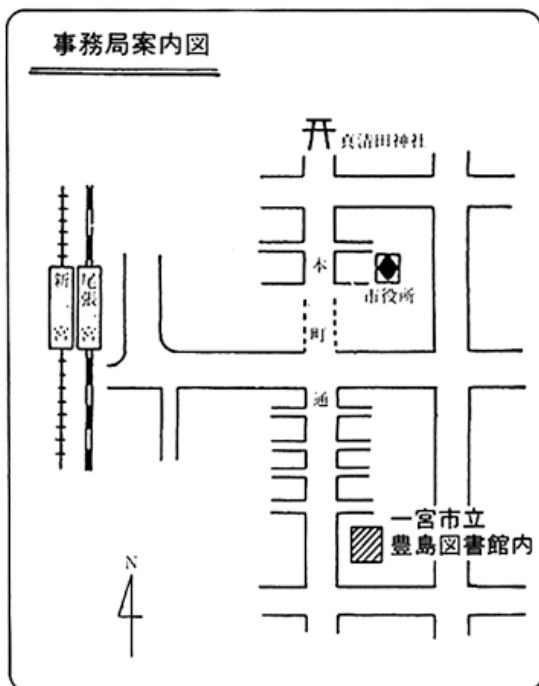
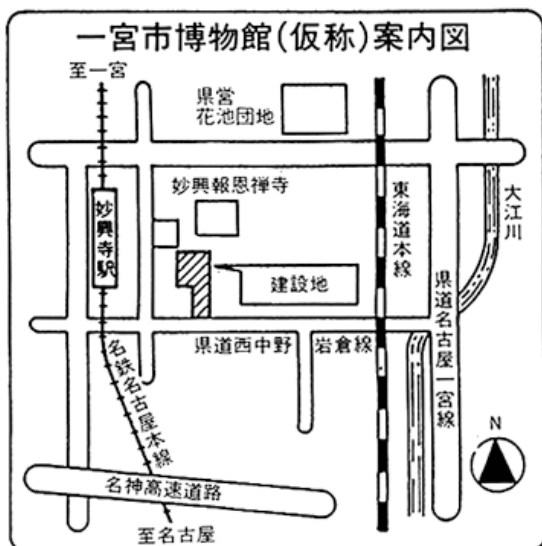
設立: 昭和56年4月1日事務局開設
昭和60年10月16日起工式

施設: 敷地9,215.61㎡(内借地1,474.7㎡)
建物/鉄筋コンクリート造一部鉄骨鉄筋コンクリート造
地上2階地下1階塔屋1階
延床面積4,573.41㎡
収蔵・調査研究部門1,521.13㎡
展示・教育普及部門等2,153.35㎡

開館: 昭和62年度

入場料: 未定

特色：「おりもののまち」として歴史的に形成されてきた一宮市の歴史と文化を体系的に明らかにする博物館であって、美術館や研究機関の機能を持ち、また市民の大学として「調査研究センター」的な役割を果たすものとする。



「愛知の博物館」No.40

発行日 昭和61年2月1日

編集・発行 愛知県博物館協会

〒489 愛知県瀬戸市南山口町234番地

愛知県陶磁資料館内

<0561> 84-7474